

Q13a **MAXI/SSC を用いた銀河中心方向に見える diffuse emission の解析**

木村公、富田洋 (JAXA)、常深博、佐々木将軍 (大阪大学)、杉崎睦 (理研)、花山喬則、吉留幸志郎、山田久幹 (宮崎大学)

全天 X 線監視装置 (MAXI) に搭載されている Solid-state Slit Camera (SSC) によってえられた全天図には、数々の点源の中にいくつかの広がったソースが検出されている。これらの構造は 0.7-1.7keV 程度の軟 X 線で強く光ってみえる。このような構造の中でもひととき大きい物が、Loop-I 又は North Polar Spur (NPS) などとよばれる、銀河中心方向に見える広がった構造である。この構造はその半径が 58° と非常に大きく、その全貌を通常の視野の狭い X 線天文衛星で観測するのは困難である。過去にこの構造の全体像を観測した衛星として、ROSAT のデータがあるが、ROSAT は輝線分解能に乏しいため、この構造の組成や、温度を精確に決めるにはいたらなかった。この構造の起源として、Sco-Cen アソシエーションからの星風で形成されたという説が有力であるが、詳しくはわかっていない。その点 SSC は、Suzaku/XIS 程度の輝線分解能を有しているため、この構造の温度や組成を精確に求めることができる。今回はこの大きな構造を NPS、銀河面の北の構造、銀河面の南の構造の三つの領域にわけて、解析を行った。この三つの領域のうち、NPS と銀河面の北の構造では、Ne、Mg の輝線が検出された。またそのスペクトルは温度が 0.3keV、元素組成比 < 0.5 の衝突電離平衡モデルで再現できた。また、銀河面の南の構造では他の領域で見られた輝線は検出することができなかった。本講演では、SSC と ROSAT の両方の詳細解析の結果を発表する。